らざりきといふも、敢て經言にはあらざるべし、かくて彼等が空想は、この海の西部をして、巨人、怪物、鬼魅の類を棲ましめき。

日、月は西方のオセアンより上り、人と神とは光輝を與へてめぐりゆく、また星も、四輪星、北斗星などを除くの外は皆オセアンより出でゝオセアンに沒す、日神は羽翼ある輕舸に乘じ、地の北方を廻りて、昇り初めたる東方に歸るとなす、ミルトンその「コムス」中にいへり、

Now the gilded car of day
His golden axle doth allay
In the steep Atlantic stream,
And the slope sun his upward beam
Shoots against the dusky pole,
Pacing towards the other goal
Of his chamber in the east.

神たちの住みませる處は、[9]テサリアのオリムプス[10]山の頂に在り、雲の門は、シーズン[11]てふ女神等の護りたまふ所にて、星宿等が地にあらはれ、復歸り來るを許す、神たちは皆各、その住所を有す、されど召されては、ユピテル[12]の居所に集ふ、オリムプスの宮居には、神たち打ちつどひてアムブロシア草を

9 Thessaly
10 Olympus
11 Seasons
12 Jupiter

喰ひ、ネクタル(神酒)を飲む、酌をなすは美しき女神ヘーベ[13]なり、彼處にて諸共に天地の事ども謀ち玉ひ、えら〳〵に醉ひたまうては、音樂の神アポロ[14]琴(Lyre)を奏づ、妙なる調につれてはミユーゼ[15]の女神等歌ひます。　かくて日ぐらし神集ひまして、おの〳〵まかで給ふ、さてなむおのがじゝ眠には就き給ふなる。

オデッセ[16]の詩中なる次ぎの數行を讀まば、ホーメル[17]がオリムプスを如何に考へたりしかを知るに足るべし、

So saying, Minerva, goddess agure-eyed,
Rose to Olympus, the reputed seat
Eternal, of the gods, which never storms
Disturb, rains drench, or snows invades, but calm
The expanse and cloudless shines with purest day.
There the inhabitants divine rejoice
Forever.

Cowper.

希臘人が考へたる神たちの住處、その斯の如し、羅馬人は未だ希臘の詩歌を知らざりし以前には、かゝる神々の集ひを想はざりしものゝ如し、されど羅馬、及びエトラスカンの兩種族とて、全く無宗教のものには非る也、彼等はみまかりにし祖先を拜せり、されば家ごとに、皆その祖先崇拜は、極めて

17. Homer　13 Hebe
14 Appolo
15 Muses
16 Odyssey

大切なる一家の義務なりき。　祖先の偶像は、家に於ても神聖なる所に安置せられ、各家時を定めて、相當の儀式を施行せりき、また寵は神聖なる場所を以て目せられたり。

希臘および羅馬の兩國民が他國民と、相交るに至りてや、異邦の宗儀、習慣また輸入せられたるもの丶如し、基督の使徒ポーロ、アデンスに至りし時、「知らざる神」に捧げたる祭壇あるを見出だせり、彼等は他國民の宗教的傳說を導き入れては、たのが鑄型に鎔融せしもの蓋し尠少ならざりしなり、よりて、これ等國民の神話を研究する者は、一の想像的神格に對して、希臘羅馬各別の名稱を附したるを悟るべし、即ち、希

30 Venus　20 Mavors　22 Hepheistos　18 Zeus
31 Paulos　27 Poseidon　23 Vulcanus　10 Pater
32 Paulus　28 Neptunus　24 Ares　20 Kronos
29 Aphroditie　25 Mars　21 Saturnus

赤のウーオイスは、[18]パーテル[19]＝父なる語を加へて、羅馬語には、ユピテルとなり、希臘のクロノス[20]は、羅甸のサツルヌス[21]に希臘のヘフーアイストス[22]は羅甸のヴーアルカヌス[23]に、アーレス[24]は、羅甸のマルス[25]又はマフーオールス[29]に、ポサイドン[27]はネプチユヌス[28]に、アフロヂイテ[29]はウエヌス[30]に當れるなり、されど此等の名稱は、只希臘のパウロス[31]を羅甸のパウルス[32]と樣に、言語のみの翻譯せられるものと思ふべからず、寧ろ、その神格の相似相同じきものを譯せりとせる方、その意を解するに近かるべくや。　假令ば、希臘文學に於て、火及び鍛冶の神は、同じはたらきとつとめとを有する神即ちヴーアルカヌス

を以て、之に當て、希臘のヘファイストスの代りに之を用ゐしなどの如し、かくて後代の希臘、羅馬の文學中には、唯羅甸名のみを有するに至りしなり。

英文學は、主として羅甸および佛蘭西文學に由來し、佛文學はた羅甸文學を蹈襲したるものなるからに、英國文學者の著作は、希臘名を用ゐるより寧ろ羅甸名を用ゐたり、アーレスと言はでマルスと呼び、アフロヂテーと唱へずしてウエヌスと名けゝるが如し、されば今こゝにも英米文學者中の著作に關する部分は重に羅甸の神名に從ふ事とせむ、

希臘及び羅馬の神話に於て、諸天の眞の帝はユピテル(ツオイス或は父ヨーヴ)なり、ツオイスは諸神の父、神と人との父と呼ばる。

ユピテルは、亦オリムプスの十二神、即ちワルカン、ウエヌス、ミチルワ、アポロ、ヂアナ、メルキユリー等、及び、その下の神々の父なり、さはいへ、ツオイスは、もと原始的の神に非ず、彼はサツルヌス[33]即ち希臘にてクロノス[34]の子なり、猶これより溯りてクロノス即ちサツルヌスは、何處より出でしかを問はざるべからず、されど、これに答ふべき記錄は、茫として捕捉し易からずとなす、唯そのおぼろげの裡より探り出でたるものは、彼はウラヌス[35]即ちアウラノス[36]より生れたり、さてウラヌスは萬物を包容し覆蓋する所の天の名

33 Saturnus
34 Kronos
35 Uranus
36 Aurnnos

37 Saturn
38 Ops
39 Rhea

なり。サツルン[37]の希臘名はクロノス(Kronos)と綴られ、時の希臘名はヒ(或はク)ロノス(Chronos)と綴らる、二者の相似たる事、想像に餘あるべし、されば之に理義をもていはゞ、ウラヌス(無限)よりクロノス(時)生れ、時よりツオイス即ちユピテル生る、故れ、彼は生くる者と死なざる者とを總括して之を支配する『時』の唯一の子なりといふを得べし、ホメロス詠ずらく、

The will of Jove I own,
Who mortals and immortals rules alone.

ユピテルはサツルン(即ちクロノス)及びオプス[38]希臘にてレ[30]アの子なり、レアはフリギアのシベレ[40]と混同せらるゝ事屢々なり。

世界の創造に關しては、なほ他の傳說あり、これに由れば、原より存するものは、地[41]とエレブス[42]とエロス[43]即ち愛となり、エロスは混沌界に浮ぶ夜(Night)の卵より生れ出でゝ、その矢と炬火とをもて萬物を破り、生を賦し、活動と喜悅とを生せりと。

サツルンとレアとは、唯一のチタン[44]の事は、後章記すところあるべし。)に非らず、この外男性には、オセアヌス[45]、ヒペリオン[46]、イアペツス[47]及び、オフイオン[48]あり、女性にはテミス[49]、ム

48 Ophion
49 Themis
50 Mnemosyne

44 Titans
45 Oceanus
46 Hyperion
47 Iapetus

40 phrygian Cybele
41 Earth
42 Erebus
43 Eros

チモシチ、オイリノメエ等ありき。彼等の權力統治は、その後、他の神々に繼承せられたりき。サツルンはユピテルに讓り、オセアヌスはチブチユーンに、ヒペリオンはアポロに讓りぬ、ヒペリオンは太陽、月、及び曙の父なり、されば彼は原始的太陽神にして華美にはでやかに描かれたりしが、後には、アポロに與へられたる裝飾となりぬ。

"Hyperion's curls, the front of Jove himself"—Shakspeare.

オフイオンとオイリノメエとは、サツルン及びレアより簒略せられしまで、オリムプスを統御したりき、ミルトン、その『失樂園』中に詠せるものあり、彼はおもへらく異邦人中に

*この矛盾なる思想は、羅馬人の信ずるサツルンを希臘のクローノスの神(時)と同一視したりしより起りしなり時神は萬物の始あるものに終を來らす、故に、その所生の子を啣みたるは、ひとしくみな亞ないなり

も人類の誘惑及び墮落の知識を有せるが如しと

"And fabled how the Serpent, whom they called
Ophion with Eurynome (the wide-Encroaching
Eve perhaps), had first the rule
Of high Olympus, thence by Saturn driven."

サツルンに關する性質行爲は、明晰ならざるものあり、一方には、彼の御代をば黃金時代なりきといふかとすれば、他の一方には、彼を目してその子を啣み盡くせる怪物なりきといふ、されどユピテルはその不幸なる運命を免れ、成長して後メチスと婚せり、彼女はサツルンに一勺の飲を捧げ、こゝ

に食て嘲み盡くせし兒子を吐出せしめぬ。　ユピテルは、その兄弟姉妹たちと謀りて、父サツルンとその兄弟チタン等に背き、彼等を征服して、或るチタンをばタルタルスに退[53]隱せしめ、他の者には刑を科せり、アトラス[54]がその肩上にも〳〵の天を荷ふ如きは、その一例とすべし。

サツルン征服の後、ユピテル[55]はその兄弟ネプチユーン即ち希臘のポサイドン[56]及びプルト[57]即ち希臘のヂス[58]と共にその領地を分配せり、ユピテルは天を取り、ネプチユーンは大洋を取り、プルトは黄泉を取れり、而して地とオリムプスとは、彼等が共有の統御に任せぬ、ユピテルは神々、及び人類の王

57 Pluto　53 Tartarus
58 Dis　54 Atlas
55 Neptune
56 Poseidon

にして、雷は彼の武器、ヴルカン[59]の造れるエギス[60]と稱ふる盾を有す、鷲は彼の愛鳥にして彼の電光を有てり。

ユノ[61]即ちヘーラ[62]はユピテルの妻にして、神女の女王なり、虹の女神イリス[63]は彼女の使者扈從なり、孔雀は彼女の愛鳥なり。

ヴルカン[64]即ちヘファイストス[65]はユピテル、及びユーノの子にして、天上の技術家なり、彼は生れながらにして跛なりしかば、母ユーノは之を惡み、天より下界に投げ出しゝなりとぞ。

或はいふ、ユピテルはその妻ユーノと相爭ひしが、ヴルカンたま〳〵母に從ひて、父に忤ひしかば、蹴落されて跛となる。

63 Iris　59 Vulcan
64 Vulcan　60 Ægis
65 Hephaistos　61 Juno
62 Hera

66 Lemnos
67 Mars
68 Arcs
69 Phaebus Abollo

りしなりと。　そはとまれ、ヴルカンは天上より墜ち、一日にしてレムノス[66]島に下りぬ、故れこの島は遂に彼に獻せられぬ、ミルトン、その『失樂園』第一卷に歌ひて曰く、

"From morn
To noon he fell, from noon to dewy eve,
A summer's day; and with setting sun
Dropped from the zenith, like a falling star,
On Lemnos, the Ægean isle."

マルス[67]即ち希臘名のアーレス[68]は、ユピテルとユーノとの子にして、軍兵の守護神なり。　弓術、豫言、音樂の神アポロ[69]、

74 Aphrodite
75 Dione
76 Cyprus
70 Latona
71 Diana
72 Artemis
73 Venuss

アポロは、ユピテルとラトナ[70]との子にして、ヂアナ[71]即ちアルテミス[72]の兄なり、アポロは太陽神にして、ヂアナは月の女神なり。　ウエヌス[73]即ちアフロヂテは、愛と美との女神にしてユピテルとヂオネ[75]との娘なり、一説にはウエヌスは海の潮沫より生[74]り出でたりともいふ。　さて西の風、波を吹きて、彼女をキプルス[76]島に送りぬ、ウエヌス彼處にてシーズン女神等に歡迎せられ、美しう裝束きかしづかれて、神々の集會に導かれぬ、諸の神たちは彼女の美麗なるに感想し、その妻たらむことを求む、されどユピテルは、この時恰もヴルカンが彼のためにいそしみ勵みて、電光を鍛ひたる勞をめづ

77 Cestus
78 Cupid
79 Eros
80 Anteros

る折柄なりければ、かく神々のウエヌスを慕ふに拘らず、之をワルカンに與へぬ。　されば最も美しき女神は、いとも醜き男神の妻となりしなりけり。　ウエヌスは、ケスツス[77]てふ帶紐を有せり、こは繡に箔おきたるものにして、愛に感ずる力をもてり、その外、彼女の愛鳥は、白鳥及び鴿にして、女神の神聖なる樹は、薔薇と番石榴となり。

[78]クピド即ち[79]エロスは、戀愛の神にしてウエヌスの子なり、彼は絶えず母なるウエヌスに伴ひ、弓矢を携へ、愛慾を神と人との心に投ずるなりとぞ。[80]

アンテロスてふ神あり、戀を蔑みする者の復讐者として表

81 Minerva
82 Pallas Athene

さるゝことあり又、相思ふ戀の表號として記さるゝ事あり。

ある時、ウエヌス、テミスに哀訴して曰くエロスは常に小兒にして、かつてねび整らざるはいかにぞと、テミス答へて曰く、彼兄弟なきが故に、おのつから成長しがたし、若し兄弟あらば、速に長ずべしと。　かくて、直にアンテロス生れぬ、これよりエロスは、俄然として、その体格も体力も成長增進したりきとなむ。

[81]ミチルヴ即ち[82]パラス、アテネは、母なくしてユピテル生れたる智慧の女神なり、彼は武裝いかめしう整へて、ユピテルの頭よりとび出でぬ、その愛鳥は鴞にて、神木は綠こまやかな

る概況なり。詩人バイロンその『チャイルド、ハロルド』中に左のごとくミネルワの誕生を詠じぬ。

"Can tyrants but by tyrants conquered be,
And freedom find no champion and no child,
Such as Columbia saw arise, when she
Sprang forth a pallas, armed and undefiled?
Or must such minds be nourished in the wild,
Peep in the unpraned forest, 'midst the roar
Of cataracts, where nursing Nature smiled
On infant Washington? Has earth no more
Such seeds within her breast, or Europe no such shere?"

83 Mercury
84 Hermes
85 Maia
86 Cadceus

83メルキユリー即ち84ヘルメスは、ユピテルと85マイアとの間に生れたる子なり、商の業、角力、体操の練習等はいふにも及ばず、總て熟練と怜悧とを要する程の事、一としてその管轄の下に非るはなし、されば物盗む術、はたこの範圍に屬するなり、彼は86ユピテルの使者にて、羽ある帽子を冠り、翼ある靴を穿てり、その手には、カツヂイスといひて、二頭の蛇の纏へる鞭を携ふるなり。

琴を造り出でしものはこのマーキユリーなりきといふ、彼生れて後四時間にして龜の甲殼を見出し、その兩邊に穴を

穿ちて、その中に線を貫き、こゝに樂器完成しぬと、故れ、殼てふ、文字は、琴と呼ぶと同じ樣に見做され、譬喩的に、音樂れよび詩歌に換へて用ゐらる、詩人グレー[87]、そのプログレス、オブ[88]、ポエジー中に歌うて曰く、

"O sovereign" of the willing soul,
Parent of sweet and solemn-breathing airs,
Enchanting shell! the sullen cares
And frantic passions hear thy soft control."

琴線九あり、これ九人のミューゼ[89]の名譽のためなり、マーキユリーはその琴をアポロに與へ、アポロは之に代へてガツ

87 Gray
88 Progress of Poesy
89 Muses

ソイスを授けぬ。

セレス[90]即ちデメテル[91]は、サツルンとレアとの女なり、セレス、プロセルピナ[92]即ちペルセフオネ[93]といふ娘を持ちしが、プルトに嫁して、こゝに黃泉の女王となりぬ、セレスは農業の女神なり。

バツキユス[94]即ちディオニスス[95]は酒の神にして、ユピテルとセメレ[96]との間に生る、彼は常に酒の人を醉はしむる力をあらはすのみにあらず、又社交的利用的方面をも表す、されば又彼は文明の奬勵者、立法者または平和の愛好者として表されたり。

94 Bacchus
95 Dionysus
96 Semele
90 Ceres
91 Demeter
92 Proserpine
93 Persephone

108 Aglaia	105 Thalia	101 Terpsichore	97 Caliope
109 Thalia	106 Graces	102 Erato	98 Clio
	107 Euphrosyne	103 Polyhymnia	99 Euterpe
		104 Urania	100 Melpomene

ミユーゼの女神等は、ユピテルとチモシテ(記憶)との間に生れたる娘等なり、彼等は詩歌を統べ治め、記憶を助成す、その數九人にして、文學、技術、學術の各方面を支配す、即ちカリオ[97]ペ[98]は叙事詩[99]を、クリオ[100]は歴史を、オイテルペ[101]は抒情詩[102]を、メルポメネ[103]は悲壯劇[104]をテルプシユーレ[105]は唱歌群の蹈舞と歌謠とを、エラト[106]は戀愛詩[107]を、ポリヒムニア[108]は聖詩[109]を、ウラニア[110]は天文學[111]を、タリア[112]は滑稽劇[113]を支配せり。

グレース[114]は、宴會、蹈舞、及び總ての壯変的遊戯[115]と美術とを支配する女神等にして、その數三人あり、その名を、オイフロシネ[116]といひ、アグライア[117]といひ、タリア[118]といふ。　スペンサー

はグラーセ[119]の任務[120]をしていふ。

"These three on men all gracious gifts bestow
Which deck the body or adorn the mind.
To make them lovely or well-favoured show;
As comely carringe, entertainment kind,
Sweet semblance, friendly offices that bind,
And all the compliments of courtesy;
They teach us how to each degree and kind
We should ourselves demean, to low, to high,
To friends, to foes, which skill men call Civility."

122 Nemesis	118 Alecto	114 Jove	110 Fates
	119 Tisiphone	115 Themis	111 Clotho
	120 Meqnera	116 Erinnyes	122 Lachesis
	121 Eumenides	117 Furies	113 Atropos

[110]フエトも亦三人あり、即ち[111]クロトー、[112]ラヘシス、及び、[113]アトロポスは是なり、彼等の任務は、人の運命の絲を紡ぐにあり、彼等は手に剪刀を把り、その好みに任せて運命の絲を斷つなり、彼等は[114]ジョーヴの傍に侍してその意見を述ぶる[115]テミスの娘等なりといふ。[116]エリンニイエ、又の名、[117]フリエは、彼等の秘密なる刺にて罪人を罰する三人の女神なり、フリエの頭は皆、蛇これをまとひて、その全身亦、一見人をして恐怖震慄せしむ、その名は、[118]アレクトといひ、[119]チシフオネ、[120]メキエーラといふ、彼等はまた、[121]オイメニデスとも稱せらる。[122]ネメシスは復讐の女神にして、神この正しき怒を、驕れる者と禮なき者とに表すものなり。

127 Plutus	123 Pan	
	124 Arcadia	
	125 Satyrs	
	126 Momus	

[123]パンは羊群と牧羊者との神にして、希臘人の誌す所によれば、彼のめづる住居は、[124]アルカヂアなりといふ。[125]サチルは、森林、原野の神にして、粗き毛を以て覆はれ、頭は短き條なす角をもて飾られ、足は山羊に似たりと云ふ。[126]モムスは笑の神、[127]プルツスは富の神なり。

羅馬人の神

前にしるしゝものは、希臘人の崇拜せし諸神にして、羅馬人はた彼等を受け入れたり、以下記せむとする所は、羅馬鬼神傳特有のものなりとす。

サツルンは、もと、古以太利の神なりき、さるを、羅馬の詩人これを希臘の神クロノスと一致せしめむとて、下の物語を作れり、サツルン、ユピテルに廢せられて後、以太利に奔り、御代しろしめしぬ、謂ふ所の黄金時代これなり、されば、彼の有難かりし御代の記念に年ごとの冬サツルナリア[1]祭執り行は

1 Saturnalia

2 Faunus
2 Fauns

る、この時は公の務みな暇を賜り、宣戦の布告も刑罰の宣告も、盡く猶豫せられ、友どちは互に物など贈りかはし、奴隷は、たゞ總ての自由を許さる、各、の家の饗應行ふとては、主人自ら家内(やうち)擧りての給仕まめやかに取りまかなふ、さるは四民平等のサツルンの御代の理想を實現すとなるべし、基督教における耶蘇(クリ)降誕(マス)祭が、その起原をサツルナリア祭に負ふ所多きは、決して拒むべからざる事實なりとす

サツルンの孫[2]ファウヌスは、原野及び牧人の神としていつき祭らる、又、豫言の神とせらるゝ事あり、さて、これが複數として用ゐられ、[2]ファウンスとなるときは、希臘におけるサチルスの如く、獵畋の諸神たり。

[3]キイリヌスは軍神なり、彼は、羅馬の創立者[4]ロミウルスが死後神として祭られしものなりとぞ。

[5]ベロナ、はた軍神なれど、こは女性神なり。

[6]テルミヌスは境界(さかひ)の神なり、彼の偶像は粗造なる石、もしくは棒にして、野の境界を表するために、地に植(た)てらるゝなり。

[7]パレスは女神にして、家畜と牧場とを統べをさむ。

[8]ポモーナは菓樹の神なり。

[9]フロラは花を司る女神なり。

[10]ルシナは誕生の女神なり。

Palès
8 Pomona
9 Flora
10 Lucina
3 Quirinus
4 Romulus
5 Bellona
6 Terminus

11 Vesta
12 Nestia
13 Vestals
14 Liber
15 Mulciber
16 Janus
17 January

[11]ヴエスタは希臘のヘスチア[12]と同じ神にして、共同の竈、私の竈ををさめたまふ。[13]ヴエスタルスてふ六人のわかき比丘尼によりて、聖火ヴエスタの神殿に焚かる、その火は市の安全のためにもやされ、年中消さるゝ事なし、若し過ちてその火を消さば、比丘尼は嚴しき律法にとはれ、太陽よりとらるゝ火を點じて、復その聖火を燃すといふ。

[14]リベルはバックスの羅甸名にして、[15]ムルチベルはワルカンの羅甸名なり。

[16]ヤヌスは天の門守なり、彼れ年の立つ日を開き初むるが故に、初月やがて、[17]ヤヌアリーと呼ばれぬ、彼は門守の神なれば

22 Lares
23 Lars
18 Numa
19 Augustus
20 Penates
21 Penus

門に兩面あるがごとく、常に彼は兩頭をもて表さる、羅馬には彼の殿堂甚だ夥し、さて戰時にはその主なる殿堂の門扉を開き、平和なるに及びてそを閉づるを恒例とす、されどこの門扉の閉鎖せられしは[18]ヌマと[19]アウグスツスとの御代の間に只一度これありしのみなりきとなむ。

[20]ペナテスは家内安全、五穀豊饒を守る神なり、彼等の名稱は彼等に聖なる食物室(パントリー)なるペヌス[21]より引出されたり、かくて各家の主人は皆おのがペナテスの僧なるなり。

[23]ラーレスまたの名ラルスはた家内の神なり、されどそのペナテスと異る所は、このラーレスの神々は、人が神として崇

"Pomona loves the orchard,
And liber loves the vine,
And pales loves the straw-built shed
Warm with the breath of kine;
And Venus loves the whisper.
Of plighted youth aud maid
In april's ivory moon-light,
Beneath the chestnut shade."

"Prophecy of Capys."

[24] マコーレー 羅馬の神たちに就きて かく歌ひぬ。

"ポモナは果園を愛し、
リベルは葡萄を愛し、
パレスは牛の息吹に暖まる
藁造りの小屋を愛し、
ヴィーナスは
四月の象牙の月光の下
誓ひの若き男女の
栗の木蔭なる囁きを愛す。"

「プロフェシー オブ カピス」は祖先の霊にして子々孫々の守りをなす。

1 Ovidius
或はOvid

オフイヂウスの開闢說

羅馬の詩人オフイヂウス[1]が創世の事を說くこと次の如し、曰く、地と海と物皆を覆ふ天と、これあるに先ちて自然の全面をおほひしものは混沌なりき、是の時に在りては、互に相衝突する物質の、自動する能はざる容積の雜然として堆集するのみ、日の世界を照らすことなく、月の盛ち虧くることなく地の動きつゝ空中にかゝることなく、海の水、はた、地を繞りてその腕をひろぐることあらざりき。　地ある處、其處に海あり、海ある處、其處に空あり、地と海と空と、相紛糾し

てわかるゝことなし、されば地も未だ堅からず、水も未だ流れず、空氣も未だ透明ならざりき。

神と自然と、こゝに仲裁を試み、かくて渾沌の世は終へぬ、海よりは地を別ち、天をその兩者より區別せり、火の部分は輕うして上に昇り、地は重うして下に降り、水は最下に位して地を浮ばしめぬ。

誰ありてその誰たるを知らぬ神ゐまして、地を理め之を分ちたまひき、また河と灣とを置き、山を高め、谷を穿ち、森や、泉や、豊かなる地や、さては眞砂原をさへ散布せさせ、空は透明となりて星の光りあきらかに、魚海に躍り、鳥空に飛び、四

2 Prometheus
3 Epimetheus

足の獸地を徘徊ひぬ、こゝに神、なほもたふとき動物あらばやとおもはす、さて諸々の神像に肖せて、人は端然の姿につくられぬ、故れ、總ての動物は伏して地をのぞみ、人はふり仰ぎて御空の星辰をながむ。

チタンなるプロメトイス[2]と、その兄弟エピメトイス[3]とは、人と他の動物とを作りて、必要なる能力を與ふるの任務を託せられぬ、プロメトイスは事務を檢査し、エピメトイスはこれを作りて、勇氣、勢力、敏捷、鋭利等、種々の賜物を、それぞれの動物に賦與し、又或物には羽翼を、或物には爪牙を、他の或物には殼を與へたりき、エピメトイスは總ての賜物を皆かく

興へ盡したるを以て、既に人に授くべきものを有せず、故れ、せむ術をその兄弟に計る、こゝに於てか、プロメトイスはミチルワの力を借り、天に上りて、日輪の兵車にて彼の炬をもやし、火を人類にとり來りぬ、されば、人はあらゆる動物に勝りて、火もて野獸を征服する武器を造るに適し、火もて地を耕す器什をつくりぬ、また火は彼が住居を暖め、寒氣に打勝つことを得しめぬ。

この時、婦人未だ作られざりき、或はいふ、ユピテル、婦人をつくりて、プロメトイス、及び、その兄弟におくり、彼等が天火を竊みたる罰にむくひ、人にはその賜物を受けたる咎を罰せむとす、原始の婦人、名をパンドラと呼び、天に在りて造られぬ、神たち各、彼女を完全にせむとて、皆これに何物かを寄せたまふ、ヴエヌスは美を、マーキユリーは辯巧を、アポロは音樂を與へたり、パンドラかくよそほしく裝はれて、下界にくだり、エピメトイスに遣らる、エピメトイスの兄弟プロメトイスはユピテルとそが賜物とは戒しめて懼るべしとて、彼に注意したれども、彼は斥けて之を用ゐず、パンドラを受け得て、　　シう彼女に愛着しぬ。　　エピメトイス、かねて禍を盛りたる瓶をその家に藏せしが、パンドラ是を覗はむと欲する心篤し、ある日エピメトイスの在らざるに乘じ、その

蓋を去りて瓶中を瞰る、これより人類幸うすう災害みちみち、肉体の上には、痛風、リューマチズム、痲氣等の病を生じ、精神には、怨恨、憎悪、敵對等もろもろの悪徳はじまり、災害の氾濫益甚しうて、つひに底止する所を知らず。　パンドラは、この様を見て、愕く事大方ならず、蓋を覆へども既に及ばず、剩す所は只瓶子の深底に潜める只一つの希望てふものあるのみ、されば今現〳〵世の今日に至るまで、悪の勢いかに強くとも、希望は常に吾人を去らず、いかなる害悪も、これあるによりて、全く吾人をして悲歎の淵に沈ましむることなし。

或はいふ、パンドラは人類を幸にせむが爲に、ユピテルにおくられたり、この時、彼女は結婚の贈物を容れたる一の箱を與へられぬ、この送物は諸々の神たち、それ〴〵に幸福を入れたまひしものなりき、さるをパンドラは、おのが不注意より箱を開きければ、總ての幸福盡く免れ出でゝ、殘れるは只希望のみなりきと。　世界に人類の住居するに至れる最初の時代は、いはゆる黄金時代なり、法律の制裁はなくとも、刑罰の歴服はなくとも、眞理と正義とは行はれたり、森林は船材にとてその木材を伐らるゝ事なく、人は市街の周圍に堡柵を建つるの要なし、劍及や、槍戟や、甲兵や、そこに忌はし

も武器ある事なうして地は人類に必要なる萬物を生ずしかも非さず転らす永久の春の花咲かすして香ひ乳と酒とは流れて川に充ち黄金色の甘蜜は樫樹より滴りぬ。　オヴィッドのメタム第一巻に

"But when good Saturn banisher from above,
Was driven to hell, the world was under jove
Succeeding times a silver Age behold,
Excelling brass, but more excelled by gold.
Then summer autumn, winter die appear,
And spring was but a season of the year.

The sun his annual course obliquely made,
Good days contracted and enlarged the bad.
Then air, with sultry heats, began to glow,
The wings of winds were clogged with ice and snow,
And shivering mortals into houses Iriven,
Sought shelter from the inclemency of heaven
Those houses the were Caves, or homely sheds;
With twining osiers fenced; and moss their beds.
Then ploughs, for seed, the fruitful furrows broke,
And oxen laboured first beneath the yoke.

To this came next in course the Brayen age:
A warlike offspring, prompt to bloody rage,
Not impious yet! .....
..... Hard steel succeeded them:
And stubborn as the metal were the men,"

Ovid's Metam, Book I.
Dryden's Translation.

罪悪は洪水の如く地に臨めり、謙遜、眞理、及び、貞節等は逃れたり、詐欺、狡猾、暴戾等は之に代りて瀰がりぬ、こゝに於てか、海を航する者は風に帆を揚げ、樹木は大洋の面を苦しむべ

く、山より伐りて舟の龍骨に用ゐられ、平等に耕作せられたる地は、小區分して地主に配られ、人はその表面に產するもののみをもて滿足せず、穿ちてはなほ鑛物を求む、害惡なる鉄、そよりも亦害惡なる黃金も彼處より採られぬ、彼等は戰爭の武器に用ゐられ、賓客はその友の家に安全ならず、人の敵はその家にあり、媳は姑に背き、兄弟は姉妹を疑ひ、夫は妻を愛せず、父は子をかなしうせず、女は母を信せず、子は遺產を得むが爲に父の夭死を希ふ、まことにまことに、地は及に刎られぬ、殺戮は此處に彼處に、神々も彼等をみすてたり、只獨り殘れる平和の女神アストレアだに、終に彼等を去り給

ひぬ。　かゝる狀況を見て、ユピテルは赫然として憤怒し、諸々の神たちを集はしめ給ふ、神たち命のまゝに急ぎ天つ宮居にむかふ、さてこの神たちの通ひ路こそ、かの大空なる銀河にして、夜の間にみゆるそれなりけれ、路の傍には神々の宮居建ち並び、御空の人々はその兩岸のをちこちに散りぼひてぞ住める。　かくてユピテル、神々の集ひに臨みて宣らすやう。　世亂れて、暴虐充ち滿てれば、いそぎ彼等を滅し、生きて甲斐ある人々、神を尊ぶ新しき人類を造るべしと、是に於てか、電光を取りて之を世界に拋ち、彼を焚き盡さむとしたまひしが、若しその餘炎、天を焦す事もやあらむと、

6 Aquils
7 Notus

こゝにその謀を中止し、地に洪水を起し、總て生命の氣息をもてる肉のものどもを、天下に絶たむと思し決めぬ。　北風アキロ[6]は雲吹き散らすものなればとて閉ぢ込められ、南風ノツス[7]送られぬ、さて天の原なる雲のことごと呼び集めて來て、蒼穹の黑きに似たる、相うち相碎くる音すさまじう、雨の降るとさながら瀑布の如し、たなつ者はたつ者、低う沈みて、農夫が一年の勞働も片時に滅びぬ、ユピテルはおのが一人なる水量もてあき足れりとせず、兄弟ネプチューンの補佐を乞ふ、彼は河を放ちて陸を犯さしめ、地震を起して大地を震蕩せしめ、大洋を激して海岸に逆はしむ、およそ地に動け

る肉あるもの、地に匐へる諸々の昆虫、家畜も人も拭ひ去られぬ、宮も聖なる地も汚され果てぬ、見渡す限りは全く是れ水なりき、全く是れ海なりき、しかも岸なき海なりき、こゝ彼處には高山の頂のみ出でゝ見ゆめり、小舟に乗れる僅少の人々は近時彼が耕しゝ處の上に舵を操れり、魚は樹の上に躍り、鍋は花園におろされぬ、猥は羊と共に泳ぎ、獅子は虎と共にもだゆ、野猪の力猛なるも牡鹿の足疾きも何の用をかなさむ、すべてその鼻に生命の氣息かよふ者、すべて乾ける地の上なりしものは死せぬ、虚空の鳥、休ふに所なく、疲れては水に落ち、小舟なる人、食なうして斃る、地の上なる萬有と

6 Parnassus
9 Deucallon
10 Pyrrha
11 Triton

とゝく拭ひ去られぬ、山も皆水におほはれ、只高きが中の高きパルナスス[6]の山のみぞ屹として浪路の上に聳えたりける。こゝにプロメトイスの裔にして殘りしものは只ドイカリオン[9]と其妻ピルア[10]のみなりき、彼は正しき人にして、妻もまた神々の信仰いと篤き婦人なりしなりき、ユピタル、この夫婦の外には、諸の生物の類盡く滅び失せたるを見、彼等の敬虔にして、且つ篤實、無邪氣なる生活をめで給ひて、乃ち北風アキロに命じて、八重棚雲を吹き拂はせ、空を地に、地を空にあらはしたまふ、チプチユーンは、トリトン[11]に命じて、その貝を吹き、漲る水を退かしむ、水その響につれて退き、

海は岸を去り、河はその底に歸りぬ、こゝに於て、ドイカリオン、ピルアにむかひて曰く、

『獨り生き殘れる吾妹子よ、結婚の紐もて親族と結ばれ、今は共に危きをわけて離るゝ事なき吾妹子よ、吾儕若しわが祖プロメトイスの力を待たば、なぞか、彼が初めて人類を造り出でけむ如く、吾等またそを造り得ざらむ、されど、こはいかで吾等の力に及ばむ、今は神殿を求めて、せむやうを神々に問ひ請はゝや。』

と、かくて泥もて汚れたる神殿を求め、進みて祭壇の前に跪きぬ、さて、如何にして是の悲慘なる狀態を回復すべきかを祈り問ひぬ、こゝに神託あり、

『頭を覆ひ、衣を結ばずして神殿を去り、汝が母の骨を汝等の後に投げよ。』

と、ピルア驚き怖れ、

『われ從ふ事能はじ、われ、いかで吾等が慈親の遺骨を瀆さむや。』

と、彼等は乃ちいとも木深き森蔭に行きて、神の御言を默想す、久之、ドイカリオンいふやう、

『おのれ密に出でたる事あり、若しわが想ふ所誤ら

ずば、神に背かずしてその託宣に從ふを得べけむ、地は萬物の親なり、石はまたその骨なるべし、されば、これをとりて後に投げむ、是れこそ神の御心ならめ試みるとも害なからむ。』

と、彼等は頭を覆ひ、衣を解き、石を拾ひて背後に投じぬ。怪しむべし、この時石は軟うなりもてゆき、暫くにして、彫刻師の手に供せられたる石膏のやうに、またく人の形をなし、さて、そのめぐりなる濕氣と泥とは肉となり、石の部分はさながら骨となりぬ。　男に投げられしは男となり、女に投げられし石は女となりぬ。　これわが人類の原始なり。

天馬

15/12/34

明治三十五年四月十日印刷
明治三十五年四月廿日發行

編者　赤司繁太郎
仝　石田元季
發行者　原田純
東京市本郷區本郷六丁目廿三番地
印刷者　馬淵鶴吉
東京豊多摩郡渋谷村字青山南町七丁目一番地
印刷所　青山學院實業部
同町同番地

天馬奥附

定價四十錢

版權所有

發行所
東京市本郷區本郷六丁目廿三番地　岡崎屋書店
東京市神田區雉子町三十二番地　岡崎屋書店

赤司嚼花
石田春風 同著

蝴蝶のをとめ

近刊

要目

●蝴蝶の處女……クピドとプシヘと
●春のしらべ……プロセルピヲ
●木魂……エヒコウ
●水仙花……ナルシスス
●人馬宮……チロン
●少人國……ピグミー
●をとめ嚴……グラツケスとシルリと
●蛙……ウトナと賊の男と
●熊凰……ガリスト
●相生……パリチスとフイレモンと
●牝牛……イオ
●海驚……シルフ
この他數篇

88
267

88
267

013723-000-9

88-267

天馬（神話梗概）

赤司 繁太郎（嚼花）
石田 元季（春風）／編

M35
ABA-0200